堺市立中央図書館蔵『源氏余編』——『雲隠六帖』（二類本）新出伝本の紹介と翻刻（一）——

小川　陽子

解題

堺市立中央図書館に『源氏余編』と題された一書が所蔵されている。国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」において同じ書名を持つ本は他に掲出されていない（著作 ID　4392098）。同データベースおよび『堺市立中央図書館蔵和漢書目録』（一九八六年、堺市立中央図書館）には「里村紹巴撰」と記述されており、連歌師・里村紹巴の関与した『源氏物語』注釈の類であろうと推察して閲覧・調査にうかがったところ、実は『雲隠六帖』二類本（1）の新出伝本であることが明らかとなったため、ここに紹介する次第である。

堺市立中央図書館蔵本（請求記号 3451。以下、「堺本」と呼ぶ）の書誌は次のとおり。

外題「源氏余編　全」（題簽中央）。二八・〇cm×一九・〇cm。袋綴じ一冊。墨付き四二丁、遊紙一丁（前）。一面一〇行。縹色紙表紙。表紙および巻末に貼り紙「1312/4」。見返しに貼り紙「源氏餘編一巻／紹巴法橋作」。蔵書印「癡山」「昭和 20 1 10／登録 25682」「堺図書館蔵書之印」「堺古家文庫」。

奥書「右有馬越中入道徳円御／本以書写者也／元和四年三月三日」

蔵書印のうち「癡山」は未詳であるが、「堺古家文庫」については古家太郎兵衛氏にゆかりのものである由、堺市立中央図書館の方々よりご教示を賜った。

古家（こげ）太郎兵衛氏とその蔵書について、『堺市立図書館100年史』（2）には次のように記されている。

（小川注・市立堺図書館の）開館当初の蔵書冊数は 2,587 冊で、その多くは私立堺図書館のものを引き継いだ。さらに今井館長の請により、少林寺町西二丁の蔵書家、古家（こげ）太郎兵衛氏の蔵書の一部が寄託された。古家氏からは後の昭和 19（1944）年に、全ての蔵書をあらためて寄贈を受け「古家文庫」として保存された。

開館時の寄託については、『大正五年五月以降／日誌』（堺市立中央図書館所蔵）（3）に記載がある。

六月拾四日（水）

一、館長来館、開館準備ニ忙ハシ。

一、田中課長、西井氏同伴来館アリ。請負等ヲ監督指揮、造作ヲ忙（ママ）ハシメラレタリ。

一、古家太郎兵衛氏ヨリ氏ノ蔵書寄託セラル。

その後、先掲のとおり昭和十九年にあらためて寄贈されたのであり、そのうちの一冊が『源氏余編』であったと判断される。当該書に「昭和 20 1 10／登録 25682」とあるのも、昭和二十年一月十日に登録がなされたことを示しており、古家文庫本寄贈時の登録作業の一端がうかがわれる。

さて、その『源氏余編』であるが、見返しに貼られた小紙片に「紹巴

法橋作」と記されているのが先述の目録およびデータベースの「里村紹巴撰」という記述の根拠となったものと考えられる。

扉には「雲かくれ／すもり／さくら人／のりのし／ひはりこ／八はし」という六つの巻名が記されており、続く本文はいわゆる『雲隠六帖』（二類本）と見て相違ない。

ここで「いわゆる」と記したのは、実際のところ『雲隠六帖』と呼ばれる物語の現存写本（二類本）はいずれも「雲隠六帖」と題されていないためである。(4) 二類本各本の外題は次のとおり。

名古屋市蓬左文庫寄託堀田文庫本「雲かくれ　全」
立花和雄氏本「雲かくれ」(5)
早稲田大学図書館九曜文庫本「雲かくれ」
内閣文庫本「六帖源氏」
天理大学附属天理図書館本「源氏六帖」
早稲田大学図書館玉晁文庫本「雲かくれ」

右の六本はいずれも一冊本である。唯一の六冊本である愛知県立大学図書館本は、第一冊の外題を欠くが、第三冊に「さくら人三」、第六冊に「八はし六」の題簽が貼られていることから、もとは「雲隠一」（表記はひらがなであった可能性も考えられる）と題されていたものと推察される。同書を納める箱には「雲がくれ六帖」との題簽が貼られているが、矢野貫一氏は「けだし、図書館に受入れ後の手わざであろう」(6) と指摘しておられる。この箱には題簽剥落の形跡があり現在の題簽は後装と考えられること、前述のとおり第三冊および六冊に各巻名を記した題簽が貼られていることから、矢野氏の御指摘は妥当と思われる。

現代の研究においてこの物語は一般に「雲隠六帖」と呼ばれており、稿者もそのように呼んできたが、右のような現存諸本の状況を鑑みれば、この呼称はあくまで後人による通称に過ぎないといえよう。

この物語は本来、「雲かくれ」以下、各巻の名のみが付されていたのではないだろうか。それは、この物語が、《『源氏物語』は六十帖の物語である》という見解を大前提として、己が『源氏物語』の一部であることを装いつつ作られた作品であること (7) と通ずるものである。いかにも『源氏物語』らしい巻名が各巻に付されているに過ぎなかった（意図的にそのようになされていた）ものを、『源氏物語』とは別のひとつの作品として享受者が受け止めたとき、「六帖源氏」「源氏六帖」「雲隠六帖」といった名が冠されていったのではないだろうか。堺本の「源氏余編」という外題もまた、そのバリエーションのひとつとして捉えたい。

堺本の場合、見返しの小紙片「源氏餘編　一巻／紹巴法橋作」においても、「一巻」とあり「六」という数字へのこだわりが失われている点、「紹巴法橋作」とあり『源氏物語』とは異なる作者による作品として受け止められている点、興味深い。本来は『源氏物語』の一部たらんとする物語であったのが、次第に異なる受け止め方をもなされつつ広がっていった、その具体相の一端が堺本の外題および小紙片には留められているのだといえよう。なお、このような物語享受の有り様を否定的に捉えているわけではない。『源氏物語』が享受者によって受け止められることで新たな本文や作品が生み出され、さらにそれが別の享受者によって受け止められていく、その繰り返しやバリエーション、相互の関わり合いの総体こそが『源氏物語』享受史であり、その解明のためにも個別の具体相を注視していくべきであろう。(8)

さて、堺本は、前述のとおり有馬越中入道徳円本を書写した旨の奥書が存する。同様の奥書は蓬左文庫本・天理図書館本にもあり、『雲隠六帖』二類本の中でも両本と近しい関係にあることがわかる。二類本伝本はこれまで七本が知られているに過ぎない上に、その最善本である蓬左文庫本と今回新たに見つかった堺本は近しく、蓬左文庫本の欠や誤写を補いうる部分も存する。よって、全文を翻刻、紹介する次第である。なお、紙幅の都合上、本稿では雲隠・巣守巻を取り上げ、桜人以下四巻の翻刻および他の二類本との関係性についての検討は次稿に譲りたい。

（注）

（１）『雲隠六帖』の現存伝本は一類本（流布本・普通本とも呼ばれる。版本とそれを書き写した伝本群）と二類本（別本・異本とも呼ばれる。写本のみの伝本群）に大別され、両者の間に基本的な物語展開の相違はないが細かな描写や作中和歌に関してはさまざまな違いがある（拙著『『源氏物語』享受史の研究』第二章　二〇〇九年、笠間書院）。

（２）『堺市立図書館100年史』（二〇一六年、堺市立中央図書館）

（３）堺市立中央図書館所蔵『大正五年五月以降／日誌』（島田克彦氏「歴史のなかの堺市立図書館―『大正五年五月以降／日誌』の紹介」《『堺研究』第39号　二〇一七年三月》）

（４）なお、版本の外題も、上方版無刊記九冊本は「雲かくれ一」以下各巻名、江戸鱗形屋版は「絵入　源氏雲隠巻　上」「絵入　源氏雲隠抄　中」（下）とある（安田孝子・吉田孝一氏『源氏雲隠巻』〈一九九〇年、古典文庫〉による）。「雲隠六帖」という呼称は『源義弁引抄』（慶安三〈一六五〇〉年刊）、『源氏綱目』（万治三〈一六六〇〉年刊）等に見出だせる（前掲注（１）拙著第三章第二節）。

（５）未見、山岸徳平・今井源衛氏『宮内庁書陵部蔵青表紙本源氏物語　山路の露・雲隠六帖』（一九七〇年、新典社）による。

（６）矢野貫一氏『雲がくれ六帖』（一九八八年、和泉書院）

（７）この点については、物語の書き出しや内容、形態といった側面を『山路の露』と比較しつつ論じた（前掲注（１）拙著結章）。

（８）紹巴と『源氏物語』周辺の物語・注釈書等との親和性の高さについては、拙稿「物語の中世―創造と注釈―」（『中古文学』第102号　二〇一八年十一月）でその一端を述べた。

〔付記〕

貴重な御蔵書の閲覧調査、翻刻をおゆるしくださった堺市立中央図書館および関係者の方々に深謝申し上げます。

翻刻　堺市立中央図書館蔵『源氏余編』雲隠・巣守巻

〔凡例〕

堺市立中央図書館蔵『源氏余編』のうち、雲隠・巣守の二巻を翻刻する。翻刻に際しては、底本に忠実であることを心がけたが、製版・印刷上の都合と通読の便宜とを考えて、次のような方針に従った。

一、底本の変体仮名は、すべて現行の字体に統一した。漢字については、できるだけ底本の字体の再現に努めた。

一、見せ消ち訂正がある場合は、見せ消ち符号を付された文字に抹消線を施した。

一、改行は、底本のとおりとした。丁の切れ目を（〇オ）、（〇ウ）のように示した。

〔翻刻〕

雲かくれ
すもり
さくら人
のりのし
ひはりこ
八はし　（扉）

雲かくれ

かくて正月の御心をきてなとれ
いよりもいとこまかにのたまひをきて
けれは人〳〵もたのもしう見たて
まつるについたちとら一といふにこれ
みつか子にこれひてとて御かたはら
さらすめしつかはせ給ふをそたゝ
一人御すいしんにて又おかへとてとし

比むつましくし給ふ御せんはかりめ
しくしてむかしおほゆるあしろ車の（一オ）
なれたるにしたすたれかけてたゝこゝ
もとに人に物きこゆへきをとて出給ふ
けふはことといみなるへきひにや中にかく
出給ふ事といふせく此比は御心もれ
いのやうにもうつしざまならすおは
すと御せんの人〳〵も見たてまつり
なやみ給ふなるかもしいかなる御あて
かいにもやおはすらんにわれ〳〵ともは
かりかく御ともにてよそのきこえもい
かゝとたゆたはるゝもさ又申へきな（一ウ）
らねはさても御くるまはいつちへか
おし奉らんと申に山の御かたへ申へき
事あるをとその給ひけるされはこ
そとおもふ〳〵まいりけるに見よふ
はかりに成給ひて我ははや此世を
はなるへきためなりしか二たひ
都にかへり見すはまいりこよさな
くはこれよりもとりねふかき山にも
いりなんとの給ふをいかてかおほく
の中にえらはせ給ひてめしくせられ（二オ）
まいらせていつちへかまかり申へきた
とへとらふすのへわしのみ山なりとも
かしこけれとも御もろともにこそとふ
たりなから申けれはさもあらは此車
をはいつくにもすておけわれはしゆ
きやうのはしめかちよりゆかんとてお
り給ひいまたあけさるにおはしつきたり
あるしのゐんをとろき給ふ事なのめ
ならすいかなれはかくしのゝめもまたし
かるへきほとにとの給へははるかに久し（二ウ）
き御たいめんをよろこひ給ふ事かきり
なしいたうやせほそり給ひてむかしの
かけのやうに見え給へはあわれと見た
てまつり給ひてうちしほたれ給ひて
とはかりありて何たる御心にてすか〳〵
とおほしめし立給ふかと申給へは源氏
　夢の世にまほろしの身に生きて
　うつゝかほにてすくしはてめや
かく思ひたちしよりはすくる月日も
いとなかき心ちそせしなとゝきこえ（三オ）
給へはあるしの院
　むらさきのうへをく露におとろきて
　はしめて夢の世をやしるらん
よろつのことにつけてたゝかの人ひとり
こそ世のまもりにてはおはしけれいかはかり
の御心さしならんと山ふしの御心にも
いとおしくもゆかしくもあたらしくも
さま〳〵にそおほえ給ひけるいまは
かけてもそのうへさはせし中〳〵あなた
のためもいとおしとていまもなみたく（三ウ）
み給ふそまことにあさからぬ御心さし
なりけるさても六条院にはおはせぬ
よし見つけたてまつりて人〳〵さは
きもとめたてまつる事いへはさらなり

む月の一日なれともかく世のおやの
うせ給へれは天地もうちかへすはかり
にてなにのかひもなしやまふなとつ
きてひたすらなくなるはつねの
ならひとわすれ草おふといふ事もあり
たとひ又世をすて給ふともいかなる（四オ）
谷のそこ山のおくなとゝそこをあらはし
てこもりゐ給ふ事はむかしよりもあれは
こそさいこかことゝにゆめかとそおもふおも
ひきやともいひつらめこれはいと心やま
しくわすれかたき御ことにこそ大将も
中宮も御なけきはつきせさりけるれ
いせいゐんはそのまゝにをきもあかり
たまはすむかしよりの御心むけした
の心さへあさからさりしかはおなしみや
つかへにも心のかきりつくし給ひし（四ウ）
事はゝ宮のふくのうちにかの御ことは
きゝしそかしいかにして御子になし
たてまつらんとおもひしをつゐにそ
のほゐもとけすしてかくむなしきさま
になり給へるそなとゝおもひ給ふにも
すへてかたときも世にあらんこゝちも
したまはす
　たらちねのおやまのすそに入月の
　かけものこらぬ朝ほらけかな
なをいかにしてかせめておはする所を（五オ）
みねとも山ともきゝあきらめんと御心の
いとまなくおもひあかしくらし給ふにあ
る夜の御夢に山の御かとゝおほしき
所にうちしほたれておこなひをし
給ふに御かたはらにいはんかたなくき
よらにあひきやうつきたる女君あり
けるをこれやこのわすれかたくし給ふ
たゐのうへならんけにいときやうさく
なる人かなとおもひ給ふほとにうちお
とろき給ひて名残もいと恋しくて（五ウ）
　おもひきやこの世なからにわかれつゝ
　夢にこゝろをなくさめんとは
かくて山には御ふたりうちかたらひ給ひ
てよの中には物思ひのくさはひになり
給へともあるしの院はかゝるかたにても
へたてなくてすくし給ふをいとうれし
き事におもひ給ひけるかくてさかの
院にも六條院にも一とせに三たひは
かりつゝさしのそき給へともとかめ
たてまつる人もなく二條の院は（六オ）
ことにかのたいの上のわたくしさまに
おもひ給ひし所なりしをもいとゝ月
ことのき日にはうしの時ことにわたり給
ひてむかしの御おもかけのみわすれかたく
そおほえ給ひける三とせはかりありて
あるしの院いと心ほそきさまになや
みわたり給ふおとろくへき事には
あらねとしはしもひとりとゝまらむか心
ほそくも侍へきかなとの給へはあるしの院
　しはしたにもとのしつくととゝまらは（六ウ）

するはの露のあとをことゝへ
うはそくの院
　このほとは何とか見てきするの露
　きえてのゝちにあとをなけくは
よをそむき給ひてとし月何をかこゝろ
かけ給ひけんいまこのしやうをはなれ
給ひて後に又御あとをはなにかとゝ
め給はんいとうたてある御ことはなり
そのするの露きえうせてのゝち何
とあとを見せめやたゝそのことく御（七オ）
いきたえは地水火風空とりたし
て何ものかのこりてとふらはゝうけ給ふ
へきかへす〳〵たゝいまなりとも御心
をおこし給はゝおもひをさめ給へと申
たまへは
　ねもいらすいたくなわれをおとろけそ
　松ふく風に夢はさめにき
かくて二日はかりおはしていとたうとき
御ありさまにてそはてさせ給ひけるい
とゝたゝ御ひとりになり給へはまき（七ウ）
るゝ事もなふそおこなひつとめ給ひ
けるつたへきゝ給へるほたるの宮ひ
けくろのおとゝあかしのうへなとみなは
かなくなり給ふときゝ給ひても世のあた
なる事いまはしめたるにもあらすやう
〳〵われもほとあるましきそかしなとゝ
おもひつゝけ給ひてそのあくるとしそ
たいのうへ七年に成給へは御くしお
ろし給ひけるそれよりはかりそめにも
此ゐんを出給ふ事なく月ことに（八オ）
こうほう天たいにそ一たひつゝまいり
給ひけるまことや御くしおろし給ふ時
　われなから心えかたきこゝろかな
　何のためとて身をやつすらん
かくてそ又十三年にあたる時さかの
おくわうしやうかたにといふ所に入ち
やうし給はんとてむらさきのうへの御は
かにおはして
　ほとけとはなにをゆふへの露の身の
　きえてののちにあとをつくらん（八ウ）
との給へはそらにこゑありて
　そのまゝに心のあとはたえにしを
　またすかたなす人そうきたる
また源氏
　身心はもとよりあともなきものゝ
　何かのこりてまたすかたなす
世の中の人の出家とんせひといへるは
この一大事をさとらすしてこそあま
りの事にかみをそり衣をすみにそ
めてはなけきはんへれ本來空と（九オ）
なりとさとりてのちはいかなることをなす
とてもとかにおそるへきもあるまし
おもへはさやうのありさまはつくれる
とかをかくさんとのさまにてこそあれ我
はそのむねはよくひらきぬるを何し
にかみをそり世をそむきたる身そや

とわれなからなを心えかたくて
　世のさまをさとりあらはす身にしあれは
　雲かくれよとおもほえぬかな
たいのうへとて我をはしめて草木の（九ウ）
風になひけるやうにあつかひし人も
あとかたなくなりぬれは心にうわさ
をしたるまてなり我もまたひかる
きみといふてさしもいつかれしかともみな
一時の夢そかしなとゝおほしめし
つゝけて
　あるものと何をかおもふふく風の
　むなしき空をはらふはかりを
これひてをくれたてまつらしとて
かの所なとしたゝめてかしこまりて（一〇オ）
さふらひけれはたゝ人間のていたら
く風さつ〳〵と吹たるあとを見るへし
とていつくへかおわすとも見え給わす
あとかた見えすさせたまはねはとも
かくもいはんかたなくあきれまとひて
さてもそらをかける鳥類も雲井に
つはさをおとすなり地をはしるけた
ものも行かたしれはこそともしのかり
ともなつくらめむかしよりふしきのもの
にたとふなるめに見えぬ吹風もや（一〇ウ）
とりそしらぬあとそなき四方にその
聲きけはこそ風のをとにとよまるらめ
なにとなりぬる世の中そとおかへと
たゝふたりなくよりほかのことそなき山の
ゐんにも人もおわせすいまはむかしの
御事もなつかしくれいせん院にこそ
まいらめとてまいりてしか〳〵なんと申
けれは中〳〵ふたゝひの御心まとひ
申もおろかなりさても此十年はかり
まのあたりにおはしけるものを夢にも（一一オ）
しらさりける事とたゝくれまとはせ
給ふ事いへはさらなりやさてもいまは
の時の給ひをきけることのはなとはな
かりきやとたつねたまへはやゝた
めらひて申さく
　わくらはにとふ人あらはふく風の
　めにも見えこぬあとゝこたへよ
これをつゐの御ことはとそ申ける
大かた此源氏五十六にて雲の上
をかくれ給ふ事もこうほうのやく（一一ウ）
そくにてかりに此世に生給ひてよろ
つの人を佛道にたよらしめきゑん
をむすひて又ゑとの衆生をみちひか
んとのちかひにてかゝる御はかりことは
ありたゝ四方のあらしの大そらを
ふきてをうちて我身をはしめお
はりを見るにつゐにわれもなく又
たもなしたとへは地水火風空あ
はすれは我身とおもひ又これかへ
ち〳〵になれは火と見水と見（一二オ）
るかことしさとれは上人といひまよ
へはほんふといふまつたく二つなき

ものなり源氏は生する所はれきせん
なれとも死するさかひを見せぬは
何事も人間にありとある事はれき
せんなれともつゐにそのはてのはて
をしる物なし只本來の面目かく
のことし人ことに此世を夢の世といふ
事大きなるひかことなり世はちやう
たんなきものなりたゝ此身こそ夢（一二ウ）
ともまほろしともさすへきかたなきを
此ちやうたんなき世を我身とをいか
にしてもひとしくしやうちうふめつの
所をたつねよとそなん

すもり

その比はたゝゆくゑなき御事を恋
なけき給ふのみにてそあかしくらさせ
給ひけるとりわけれいせんゐんの御
事ははるゝ世なくいかておはしまさん
所へ行わさもかなと御心のおこた（一三オ）
りなく佛をねんしたてまつり
給ひてさらは世をやそむかましな
とゝおほしめしけれとも女一の宮も
いまた御うしろみなともなくみやす
所の御はらのひめ宮わか宮なとら
うたけにておはするを見給ひても
おほしめし立事のすちいとかたけ
なれは

ものことのみすてかたきにほたされて
われそすもりになりぬへらなる（一三ウ）

かくおもふもいとぬるき心そかしけに
や人の身に三身とてあるなるかそ
れを見あらはさぬかきりは心もぬる
く世もはつかしきといふなるものをと
あさましくおほしめしつゝけて此世
をいとひはなれてしかなと御心
ひとつにのみあかしくらし給ひてやう
〳〵本來の面目といふはたゝ我身
の上の三とくくきやうのていなり法
花にとりてはこれを十女是とも（一四オ）
いふなり如是相といふはわかかたち
なりこれをわうしんの如來とも
けたつともいふなり如是性といふは
わか心のしやうをいふなりこれをほ
うしんの如來とも又くうりんとも
いふなり如來（是）たいといふは我身のたひ
なり法身の如來とも又ちうだうとも
いふなりこれをもとゝしてそ十如是
ともいふなる此ほつほうわうの三じん
を我身の上としらさるまよひとも凡（一四ウ）
夫とも又衆生ともいふなりこゝをしる
時如來とも上人ともさとりともいふなり
これをよくさとりぬれは三身如來と
も三とくのめんもくともいひあしく見
れは三とくのほのほとも三ねんのし
やさうとも三こうともいふなりたゝこれ
一ねんのしやうする所なりまつたく本
來の面目ほんかくの如來と二つなき

ものなり我うへなきくらいにておかせる
とかありとも心にはおほえされとも（一五オ）
よろつのことほと〳〵にしたかふ事な
れはたみたる物いけるかきりつくりた
るといはんもまろかやうのものたゝ
一ことのおかしといはんも同事そかし
されはひちりの御かとゝきこえしも
一二のたかひめによりてこそちこく
のくをはうけ給ひしなれとやう〳〵
この世のかれたまはん御心つかひふ
かくそみけれはわか宮ひめ宮なとも
なへて御心にいりたるけはいもなく（一五ウ）
むつましとおもひたてまつり給ひし女
御后も何ともおもひ給はす我はそもい
つくより來れるものそなとゝあしたにお
きさせ給ひてはこよひもかくてあけた
りと御覧し夕へにはけふもむなしく
暮ぬ何そと出入いきにあうむをさ
とりつゐに御くしおろしあけくるゝに
しやうじゆのらいかうをまちたゝあん
ざもくねんとしてくこをたてまつれ
はめしたてまつらされはとておと（一六オ）
ろへ給ふ事はせねと蔵人の少将おな
しくすみそめにやつしはてさふらひ
けるかいとはしけにおもひたてまつる
を御らんして
　なにかいとふなにをかなけくかりの世は
　あるにまかせてあるそありよき

とうちすんしてそおはしけるさても
おとゝはをのゝひめきみをむかへと
り給ひてかたちをさへあらためてすほ
うをはおもふとこゝろはんへれはとてそう（一六ウ）
ほにあつけおき給ひてすきにし
ねたましかりつる心をうしなひて
よろつを我心とすゝ敷とそおほし
給ひけるいかにおほすかといとしり
かたしうち御門やう〳〵おり位の御
心ちかくなり給ひてもあはれ二の宮
のおはせましかはと御かと后御心のは
るゝよなくそ夜かなしみ給ひける御
くわゆつりちかくなるを二の宮とう
くうにゐ給ふへきよしくせんおはし（一七オ）
けれは春の宮むかしよりくらゐなと
さらにのそみなしことにさへなといふ事
いとたと〳〵しきなり同事三の
宮を御子とはさためたてまつり
給へとの給へはいかてさかさまなる事
はときこえ給へともせいわのいにし
へも一の御子には十のせうとにて
おはせしかともいにしへのちきりもや
さてこそ世をたもち給ひしかこれは
ことにいつかたにつけてもへたてぬ御（一七ウ）
事なりいさゝかうとみあるましと
しゐて申給ふもとよりしたの御心も
さやうにあらまほしく御門きさきと
し比の御心のまゝ三の宮に御くわ

ゆつりさたまれるかほるは内大臣に
なり給ひて世をまつりこち人なひ
きつかふまつる事こゐんの御時より
もみきはまさりにきわしさ世のためし
にもなりたまふへきまてそ見えける
二條のたいの御かたはやかて御くわ（一八オ）
ゆつりの夜まいり給ひてふちつほの
女御と申けるそのとしの八月にき
さきゐ給ふへきにも此ふちつほとそ
きこえけるいまそとし比の御心さしの
すくれけるほと我御心にも思ひし
られ給ふらんかし左大臣の六の君
もせうきやうてんとていとまめかしく
そ見え給ひける式部卿のひめみや
大みやの御かたにみやのひめ君とて
おわせしを當代の御門いまた兵部（一八ウ）
卿にてあさからすおもひ給ひしをうちの
おとゝ大将の比をひいかてありつるわか
こゝろ思ひしらせたてまつらんとこの
宮のひめきみをかたらひつき給ひけ
り御子もいと口おしき事にはおもひ
たまへともわか御ふるまひもおもひしり
たもふにやふかくもゐんし給ひすかくて
この御はらにわかきみひとり出おはす
さへふさはしからすいとしも心さし
はなきことをたゝみやの御心をうこか（一九オ）
ひたてまつらんとおもふはかりなるにかく
たはふれにくき事さへ出きぬるを
いとはしたなく思ひわたり給へる
比しも三の宮くらゐにつき給ひぬる
せんしになるへき女房おわせさり
けれはこのたひそ心ゆつり給ひけ
るいとねたなからもせんしにたてゝ
三位のきみとそきこえけるおとゝは
女二の宮のあつまのきみにおとらぬ
きしきようにもてなしていとゝあら（一九ウ）
まほしくすくし給ふにいとありかたき
人の御心はせと上下あさからすおも
ひきえ給ふにふちつほの御うし
ろみもさなからこのおとゝそうけたま
わり給ひけるいかなるおりにかありけん
ふちつほへいとしのひてたいめんし
給ふ事ありむかしものかたりなといと
うちとけてきこえ給へるにあはれ
なる事たえて
　月かけは見し世の秋にかはらぬを（二〇オ）
　やとせる袖のせはくも有哉
なつかしもあはれにもきゝ給ひてふち
つほ
　雲の上に思ひのほれるすみかにも
　見し夜の月のかけはわすれす
かくのみ折〳〵につけわか身とものさかへ
おわするにもあはれおわせしかはとお
もひたまはぬよるひるなきをいとあ
りかたき御心ともにこそ世人もつたへ
あわれかりたてまつりける（二〇ウ）